

香川県民“イチ押し”観光資源

～香川の地域活性化に向けて～

1.はじめに

人口減少社会をむかえ、地方経済の衰退が憂慮されるなか、交流人口の増加に寄与し、地域活性化につながる観光振興が注目を集めている。そこで、香川県民に県内の観光について、アンケートを実施した。質問は、回答者自身と同世代の県外の知人に香川のどこを一番にお薦めするか、というもので、主要な観光地等を19か所あげて選択してもらう方法でアンケートをとった。詳しい内容は以下の「アンケート調査要領」の通りである。なお、この調査はそれぞれの観光地等を評価、ランキング付けを目的とするものではない。また、主要な観光地等として便宜上あげた19か所以外にも香川県には多くの魅力的な観光資源があるのでその点はご了解願いたい。

アンケート調査要領

1. 調査期間 平成24年8月1日～3日

2. 調査対象 香川県内在住の20歳以上の男女

3. 調査方法 インターネット調査
(調査会社の登録モニターによる回答)

4. 有効回答数 526人

5. 回答者の構成

■年代別回答者数(人)

	計	構成比	男	構成比	女	構成比
20代	50	9.5%	24	4.6%	26	4.9%
30代	90	17.1%	46	8.7%	44	8.4%
40代	121	23.0%	39	7.4%	82	15.6%
50代	120	22.8%	42	8.0%	78	14.8%
60代以上	145	27.6%	100	19.0%	45	8.6%
合計	526	100.0%	251	47.7%	275	52.3%

■市町別回答者数(人)

	計	構成比	男	構成比	女	構成比
高松市	268	51.0%	133	25.3%	135	25.7%
さぬき市	28	5.3%	16	3.0%	12	2.3%
東かがわ市	16	3.0%	6	1.1%	10	1.9%
三木町	18	3.4%	8	1.5%	10	1.9%
土庄町	1	0.2%	1	0.2%	0	0.0%
小豆島町	3	0.6%	1	0.2%	2	0.4%
直島町	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
坂出市	26	4.9%	11	2.1%	15	2.9%
丸亀市	51	9.7%	17	3.2%	34	6.5%
善通寺市	13	2.5%	7	1.3%	6	1.1%
三豊市	21	4.0%	12	2.3%	9	1.7%
観音寺市	33	6.3%	15	2.9%	18	3.4%
宇多津町	15	2.9%	7	1.3%	8	1.5%
多度津町	10	1.9%	7	1.3%	3	0.6%
綾川町	12	2.3%	4	0.8%	8	1.5%
琴平町	5	1.0%	4	0.8%	1	0.2%
まんのう町	6	1.1%	2	0.4%	4	0.8%
合計	526	100.0%	251	47.7%	275	52.3%

6. 質問内容

(問1)

ご自身と同世代の県外の知人に「香川県を初めて観光したいが、どこがお薦めですか。」と相談された場合、知人にどこをお薦めしますか。1番目にお薦めする先、2番目にお薦めする先を選択してください。

<選択項目は次の20項目>

①讃岐うどん店、②栗林公園、③金刀比羅宮、④屋島、⑤寒霞渓（小豆島）、⑥二十四の瞳映画村（小豆島）、⑦醤の里（小豆島）、⑧五色台、⑨瀬戸大橋記念公園、⑩NEWレオマワールド、⑪丸亀城、⑫国営讃岐まんのう公園、⑬直島（地中美術館などのアート施設）、⑭豊島（豊島美術館などのアート施設）、⑮香川県立東山魁夷せとうち美術館、⑯総本山善通寺、⑰琴弾公園（観音寺市）、⑱津田の松原（さぬき市）、⑲讃州井筒屋敷（東かがわ市）、⑳その他（具体的に）

(問2)

1番目、2番目にお薦めした先のご自身のそれぞれの訪問（利用）頻度を選択してください。

<選択項目は次の6項目>

①今まで訪問（利用）したことがない、②5年以上訪問していない、③2～4年前に訪問した、④1年に1回ぐらいは訪問している、⑤よく訪問している、⑥その他（具体的に）

7. 注意事項

本文中に使用の図表のうち「讃岐うどん店を除く」集計（図1、2以外）は、1番目にお薦めした先が「讃岐うどん店」の場合、2番目にお薦めした先を1番に繰り上げて集計したものである。

2. 県民イチ押しは「讃岐うどん店」

アンケート調査の集計結果は図1の通りである。うどん県を宣言している香川県民一押しの観光資源は、予想通り「讃岐うどん店」(支持率43.7%)であった。若い世代を中心に讃岐うどん店は圧倒的な支持を得ている(図2参照)。

平成7年ごろから穴場のうどん店巡りをすることがブームとなりはじめ、平成14年に入り県内のセルフうどん店チェーンが競うように東京へ出店、讃岐うどんが全国的なブームとなった。人気店ともなると休日は長蛇の列ができ、駐車場には県外ナンバーの車が目立つ状況が今も続いている。



行列のできる人気「讃岐うどん店」

図1 県民一押し観光地等(回答割合)

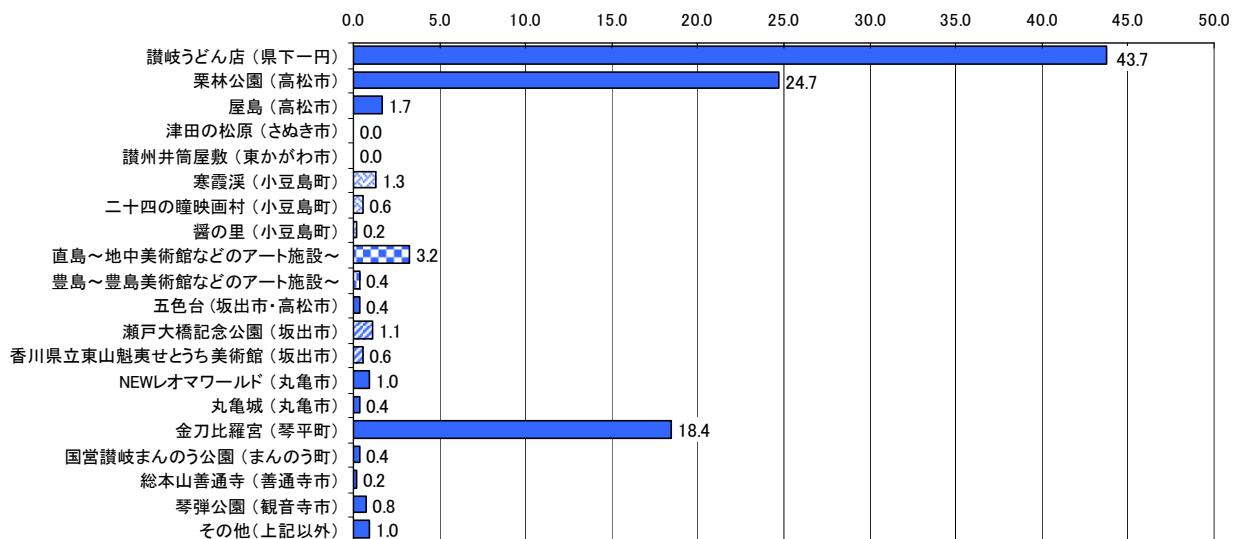
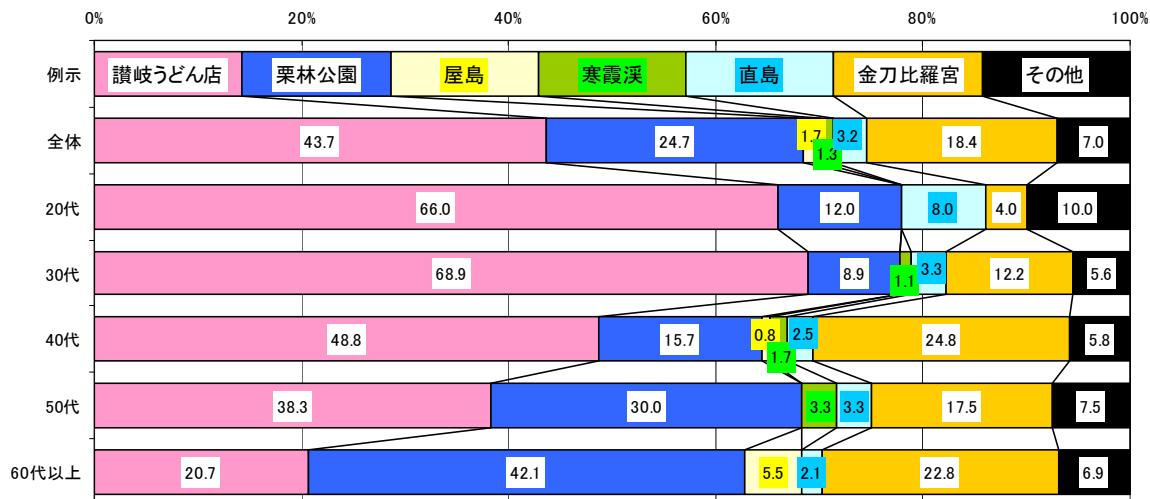


図2 県民一押し主要観光地等(年代別 回答割合)



3. 観光地では、金刀比羅宮、栗林公園

讃岐うどん店を除いて一押し観光地等を答えてもらった結果は、図3の通りである。県民の支持が高かったのは、香川観光の“定番”である、金刀比羅宮と栗林公園であった。図4で年代別に、一押し先の割合を見ると、若い世代は金刀比羅宮を支持する割合が高く、“金刀比羅宮=785段の階段を登る”イメージが強いのか、年代が高齢になるほど、金刀比羅宮よりも栗林公園の支持の方が高くなっている。

また、若い世代を中心に、現代アートを介して地域活性化を進める「直島」を推す割合が高くなっている特徴がみられる。

図3 県民一押し観光地等(回答割合) ~讃岐うどん店を除く~

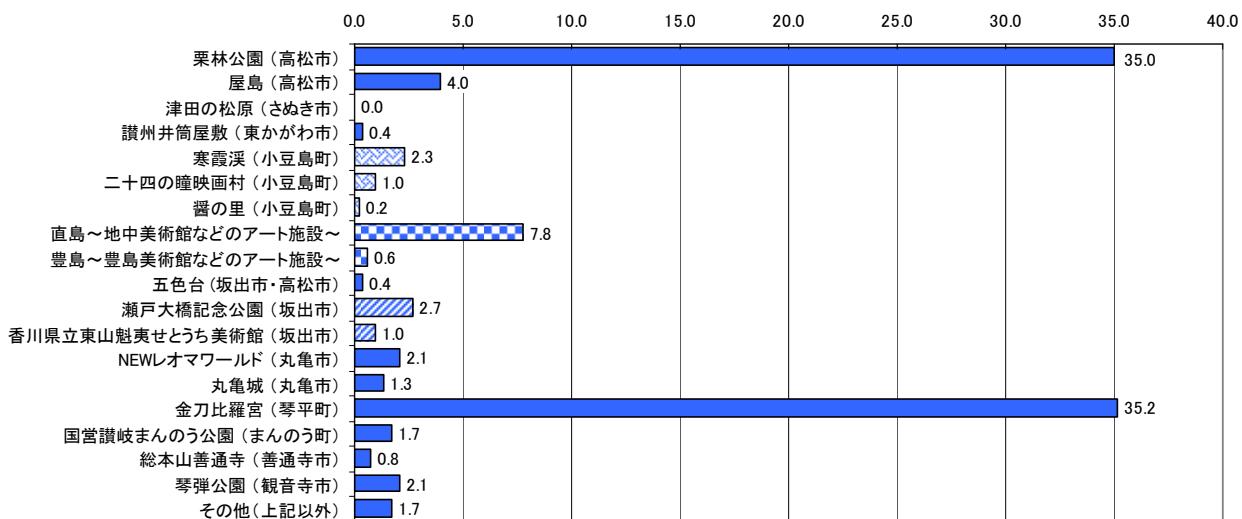
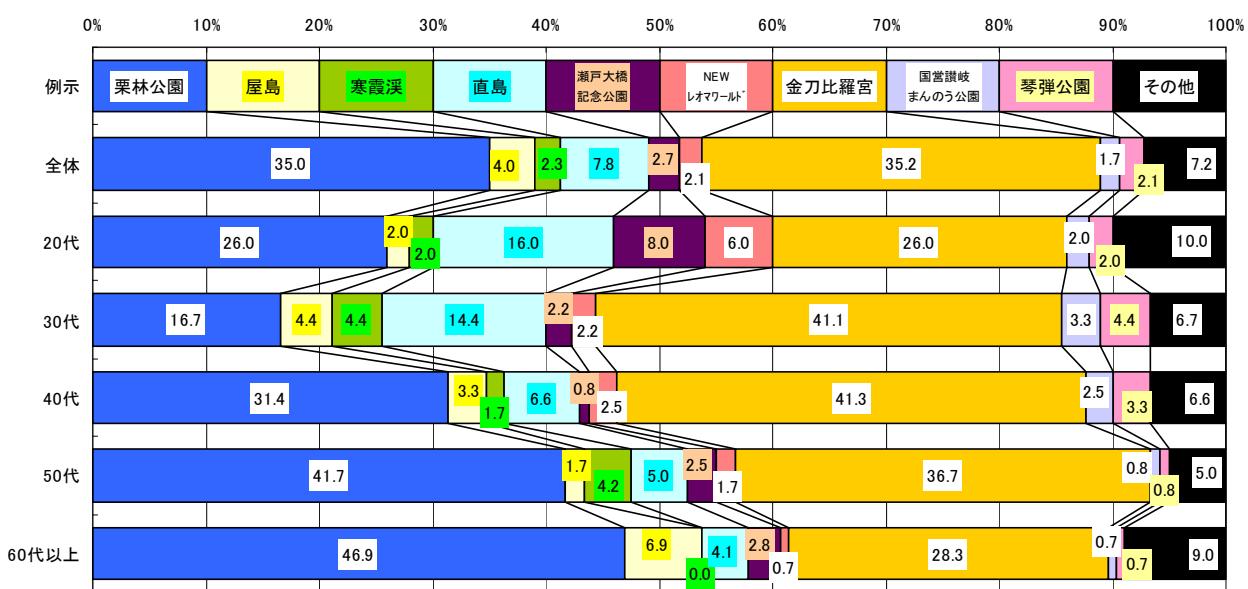


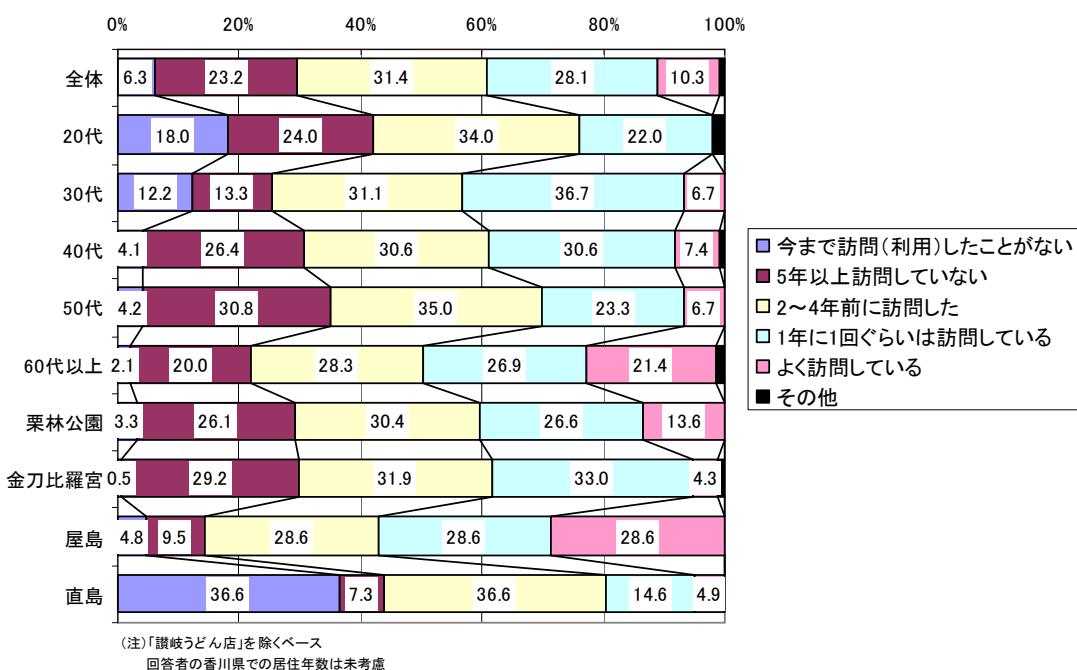
図4 県民一押し主要観光地等(年代別 回答割合) ~讃岐うどん店を除く~



4. 自ら利活用しているか

交流人口の増加の面では、県外観光客や外国人観光客の誘致も大切ではあるが、まず、県民に支持され、利用されることによって、その観光地や地域は、磨かれ、活性化していくものと考える。一押しした観光地等をどのくらいの頻度で自ら訪問（利用）しているか質問した結果は図5の通りである。全体で「よく訪問している」「1年に1回ぐらいは訪問している」と答えた人の割合の合計は38.4%、一方、「今まで訪問したことがない」や、足が遠のいている「5年以上訪問していない」、訪問頻度の低い「2～4年前に訪問した」と回答した人の割合の合計は60.9%となっている。

図5 回答者自身の一押し先の訪問頻度



5. 東の「栗林公園」×西の「金刀比羅宮」

<栗林公園の最近の取り組み>

国の特別名勝に指定されている栗林公園（高松市）は、歴代藩主が百年以上の歳月をかけてつくりあげた回遊式大名庭園として国内外から高い評価を得ている。技術水準の高い日本庭園を世界に紹介する米国の専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」による「2011年日本庭園ランキング」で、栗林公園は、足立美術館（島根県）、桂離宮（京都府）に続く、3位を獲得している。また、フランスの旅行ガイド「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」で栗林公園は、「わざわざ旅行する価値がある」として最高評価の三つ星★★★にも選ばれている。

ここ 10 年の栗林公園の入園者数をみると、年間 50~60 万人台で推移している。ライトアップ等のイベントの定着化に加え、平成 24 年 7 月には、園内の池（南湖）で遊覧和船の運航を始めるなど、誘客促進の新しい試みが行われている。また、栗林公園東門横に県産品の販路拡大等を目的とする新物産販売棟の建設（平成 25 年春オープン予定）が進められており、周辺施設の魅力も高められている。



南湖周遊の和船「千秋丸」

＜金刀比羅宮の最近の取り組み＞

金刀比羅宮は琴平町の象頭山中腹に鎮座する神社で「こんぴらさん」と呼ばれて親しまれている。長く続く参道の石段が有名で御本宮まで 785 段ある。参道沿いには多くの土産店等が集積し、現存する日本最古の芝居小屋である旧金毘羅大芝居「金丸座」や国の重要文化財「書院」などもある。

ここ 10 年の観光客の琴平町への入込状況は、年間 300 万人前後で安定的に推移している。平成 16 年には、33 年に 1 度の“平成の大遷座祭”、平成 19 年には、円山応挙の襖絵などを特別公開した「書院の美」展、新茶所「神椿」オープンなどで賑わった。昭和 60 年より、金丸座では毎年春に「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が公演されているが、平成 24 年 11 月には同芝居小屋で坂東玉三郎による舞踊公演が開催され注目を集めた。



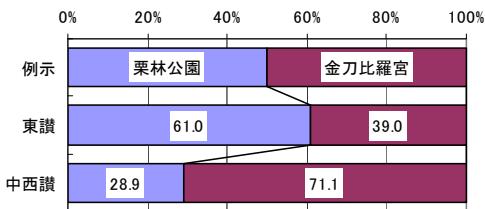
金丸座

＜支持層の比較＞

アンケートで、栗林公園、金刀比羅宮をそれぞれ一押しした層の比較をしてみると、やはり馴染みがあるのか、それぞれの観光地がある周辺地域の住民の支持が高く、栗林公園は、香川県の東部（東讃）、金刀比羅宮は県の中西部（中西讃）の支持が高い（図 6 参照）。

年代別では、栗林公園は年代が高くなるほど支持が高くなる傾向が見られる（図 7 参照）。訪問頻度を比較すると、栗林公園の方が手軽に訪問できるのか、金刀比羅宮よりも「よく訪問している」割合が高く、高齢になるほどその傾向が強く見られる（図 8、9 参照）。

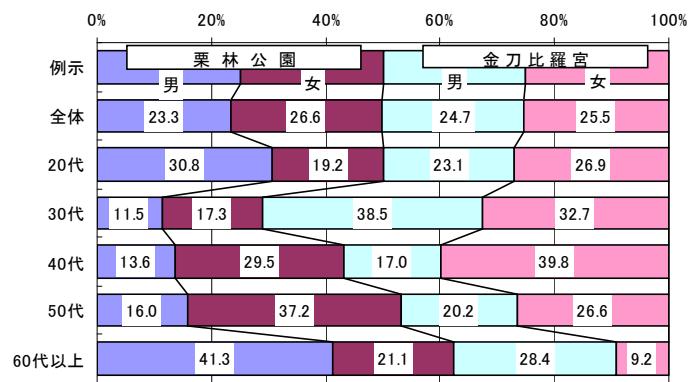
図6 回答者一押し割合(住所別)



(注)・東讃は、高松市、さぬき市、東かがわ市、三木町、土庄町、小豆島町、直島町。中西讃は、坂出市、丸亀市、普通寺市、三豊市、観音寺市、宇多津町、多度津町、綾川町、琴平町、まんのう町。

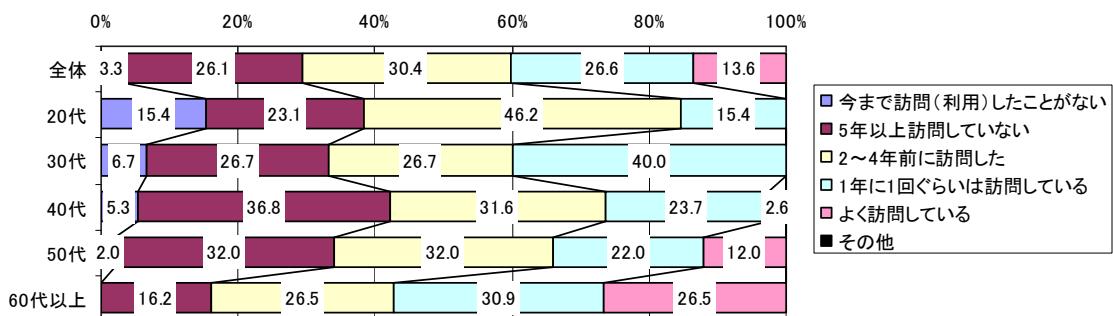
・「讃岐うどん店」を除くベース。

図7 年代別男女別一押し割合



(注)「讃岐うどん店」を除くベース

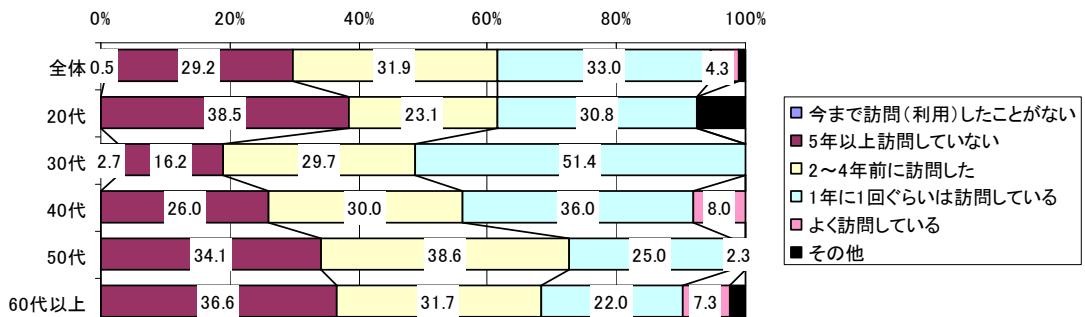
図8 一押し回答者の訪問頻度(栗林公園)



(注)「讃岐うどん店」を除くベース

回答者の香川県での居住年数は未考慮

図9 一押し回答者の訪問頻度(金刀比羅宮)



(注)「讃岐うどん店」を除くベース

回答者の香川県での居住年数は未考慮

6. 直島等の「現代アート」の台頭

瀬戸内海に浮かぶ島「直島」は、株式会社ベネッセホールディングス、公益財団法人福武財団が展開しているアート活動「ベネッセアートサイト直島」として、ベネッセハウス（平成4年開館）、家プロジェクト（平成10年開始）、地中美術館（平成16年開館）など、現代アートの島として国内外から注目されている。

平成22年には、その直島を中心とした瀬戸内海の7島を舞台とする「瀬戸内国際芸術祭2010」が「地域の活性化」と「海の復権」をテーマに開催された。7月から10月の開催期間中、93万人の来島者があり、現代アートを介して、それぞれが特徴をもつ

た島々の魅力に多くの人々が感動した。

平成 25 年 3 月 20 日には、「瀬戸内国際芸術祭 2013」が開幕する。会場は、前回の 7 島（直島・豊島・女木島・男木島・小豆島・大島・犬島）や高松、宇野両港のほか、中西讃の 5 島（沙弥島・本島・高見島・粟島・伊吹島）が加わり、春、夏、秋の 3 期に分けて計 108 日間開催される。



直島の「家プロジェクト」の作品の1つ
『はいしゃ(大竹伸朗)』写真:渡邊修

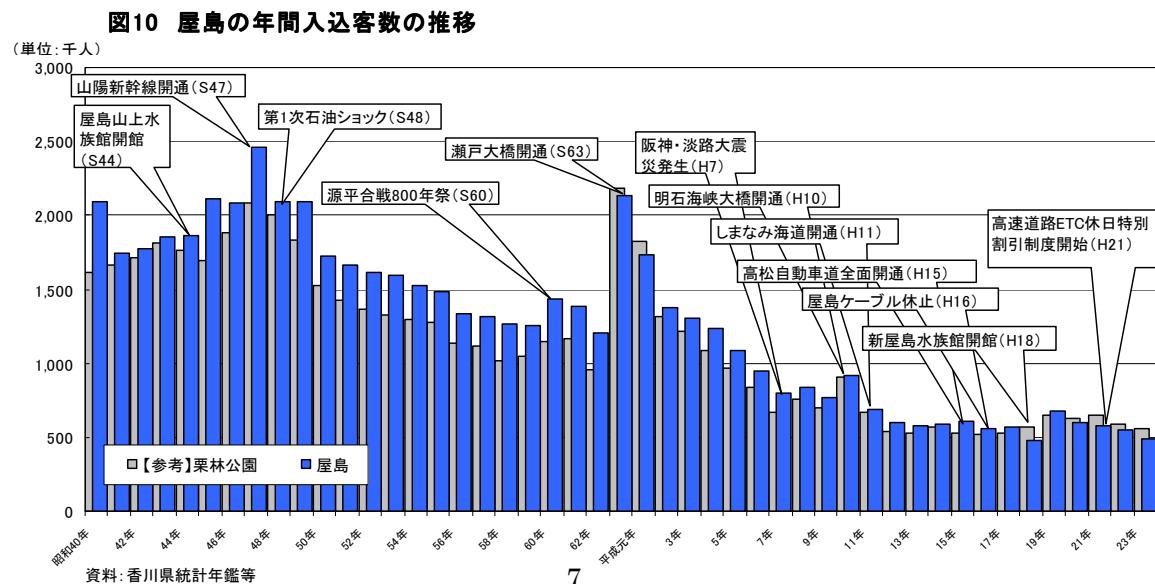


女木島『MEGI HOUSE(愛知県立芸術大学)』
空き家をアトリエ兼ステージに改装した作品

7. 卷き返しを図る「屋島」

高松市にある屋島は標高 293m の溶岩台地で、瀬戸内海国立公園の中心で、展望台としては絶好の位置にあり、山上からの風景は雄大で壮観である。屋島の檀ノ浦は源平合戦の舞台として知られ、屋島山上には四国八十八箇所の 84 番札所の屋島寺や新屋島水族館がある。飛鳥時代の山城で日本書紀にも記述がある屋嶋城（やしまのき）の城門跡も発見されている。

モータリゼーション全盛の昭和 40 年代には年間 200 万人を超える観光客が訪れる屋島観光は活況を呈していた。しかし、その後は低迷し、山上にある宿泊等の施設の多くが閉鎖され廃墟化し、屋島に対する印象を悪くさせた。昭和 4 年開業の歴史ある屋島登山鉄道（ケーブルカー）も平成 16 年休止（17 年廃止）となった。屋島への入込客数の長期推移は図 10 の通りである。



屋島を、現代アートを取り込んで復活させようとする動きがある。平成 24 年 11 月 4 日には前述の「瀬戸内国際芸術祭 2013」のプレイベントとして源平合戦を現代風に再現した「現代源平屋島合戦絵巻」が市民参加のもと盛大に開催された。廃止されたケーブルカーの屋島山上駅周辺を現代アートで活性化する話も出ている。

また、屋嶋城関連の動きも活発化しており、平成 25 年秋に、古代山城跡がある自治体の首長らが歴史遺産の活性化策を探る「古代山城サミット高松大会」が開催される。



「現代源平屋島合戦絵巻」の様子



昭和 4 年開業当時に建てられた屋島山上駅の駅舎。
経済産業省の「近代化経済産業遺産」にも認定されている。

8.最後に

屋島の活性化について広く専門家や市民等の意見を聞く高松市の『屋島会議』を傍聴する機会があった。その会議の中で出た意見で印象的だったのが、屋島は一体誰のものなのかと言う議論である。観光業者のものなのか、周辺地域住民のものなのか、高松市民のものなのか…。昭和 40 年代の屋島観光が華々しかった時期を知る人達は観光面に目が行きがちではあるが、屋島には貴重な自然や文化財が多く点在しており、違う角度から見ると屋島はとても魅力的な場所である。屋島の自然を守っている人や屋島の文化財の保護に関わっている人もそれぞれの立場で屋島の活性化を強く望んでいると感じた。

屋島会議で気付かされたことがある。自分は香川に長年住んでいながら屋島の自然や文化財、登山道も多くあることなど、ほとんど屋島の魅力について何も知らないということである。もし、知っているつもりで、足が遠のいている観光地等があれば、もう一度訪問してみてはどうだろうか。最近は、地域活性化の面から観光が見直され、新しい取り組みも盛んに行われている。その観光地、地域の良さなどを再認識するだけでなく、新しい良さを自分なりに発見し、国内外の友人、知人に、香川の良さを紹介できれば、地域の活性化にもつながると考える。

(主任研究員 高木俊裕)